



もつかんできていました。ただ日中は、職員が複数おり、しごとや活動の目的がはっきりしており、全体にダイナミックに日課や集団が動いているため、本人が行動を切り替えるタイミングもたくさんあるのです。それに比べて、くらしの場は、日中ほど日課が明確ではなく、なによりも世話人が一人になると、互いに気持ちや行動を切り替えにくくなることが多いのです。また、家庭がそうであるように、安心できるくらしの場であるからこそ、「がんばっている自分」ではなく「素のままの自分」が出やすいということもあるの

実践の本質が伝わるには、障害のある子やなかまへの実践において、その「障害」や「行動」に向き合うのではなく、人格と向き合うことが大切なのではないかということをよく話します。しかし、それは容易いことではありません。頭ではわかっているけれども、まず目につくのは、その「行動」であり、「障害からくる困難さ」であることも多いと思います。それを表面的な見方、ま

### 実践の本質が伝わるには

子どものこと、なかまのことを職員同士が語りあうこととおしくなる、それは、子どもやなかまに対するまなざしに少なからぬ影響をもたらします。「明日からはこういう具体策でのぞみましょう」という支援の方策を明確につかんだわけではないけれど、あんなに困っていたのに、事例検討会の直後からなんとなく明るいきざしがみえてきた：そんな経験はありませんか。



# 成人期のなかまたちが 教えてくれること

連載も残すところ2回となりました。連載のなかでも、たびたび「職員集団で話し合うこと」の大切さに触れてきましたが、最後は、職員集団のことについて考えていきます。語りのなかで、**「なかがまのこころ、なかがまのこころがどうおこくなる」**

私はよく、発達に関わる学習会や事例検討会に参加させてもらうのですが、あるなかまの「問題行動」や「支援のむずかしさ」からはじまった議論が、会が終わるころには、そのなかまの「やさしさ」や「おもしろさ」がたくさん出されている、ということがあります。

ある施設では、作業所（生活介護）で日中支援をしている職員と、くらしを支援するホームの世話人とが一緒に参加する学習会を行っているのですが、そこで、互いに実践について語り合うグループワークの時間もたれました。そのなかで、ホームの世話人が、悩みを打ち明けました。ある女性のなかまが、毎日のように、ゴミを集めたり、壁紙を破いたりというこだわりを強くみせ、そのたびに叱ったり止めたりせざるをえないことが多い、「今日も叱ってしまった」と世話人として自己嫌悪に陥ってしまうという悩みでした。

そのなかまは、日中の作業所でも、そうした「こだわり」を強くみせてきました。日中の職員も何度か話し合うなかで、「こだわり」だけで彼女をみないこと、「こだわり」にこだわりあわないこと」を、職員集団が感覚的に

グループワークでは、さまざまな場面での彼女の姿を出し合うこととあわせ、そうしたくらしの場での支援が抱える「むずかしさ」について共感しあいました。そのなかで、作業所からホームに帰る際に「今日（の世話人さん）ハダレカナ」と楽しみにしている姿が出され、また、ホームでも「こだわり」だけでなく、他のなかまの世話をしたり甘えたりする「ほほえましい姿」があることが語られていきました。

## 第11回 職員集団を考える①



滋賀大学 白石恵理子

しらいし えりこ / 1960年、福井県生まれ。大津市発達相談員などを経て、現在滋賀大学教育学部教授。おもな著書に『一人ひとりが人生の主人公』『しなやかにしたたかに仲間と社会に向き合って』『保育・教育のための発達診断』（共著）（いずれも全障研出版部）『人間発達研究の創出と展開—田中昌人・田中杉恵の仕事を通して歴史をつなぐ—』（共著）群青社など多数。